子どもたちと一緒に過ごす筆者（左）

ました。

何をする気も失って、ある時、じっと一人の重い障害児を抱いていたら、その子が、すばらしい笑顔を私に見せてくれました。その時私は、初めて、その子がこんなすばらしい笑顔が出来ることを知ったのです。それは正しく砂漠の中で宝石を見つけた思いでした。

この日から私は宝さがしの医療を始めました。それはアラを探し出して、何とかしてそれを改善しようとする努力を後まわしにして、まず子供たちの中にある宝物を発見することに努めました。それには、何も特別なことをせずに、子供たちと一緒に過ごす時間をできるだけ長くするようにしました。食事や入浴など、医療と直接関係のない時間も一緒に過ごしました。

こうして時を過ごすうちに、そこで見いだした宝物がびっくりする程多いのに気がつきました。何もできないと信じていた重い障害者が、実は沢山のことができることを教えられました。そればかりではなく、子供たちは、もっともっといろいろな事をしたがってさえいるのです。

何よりも嬉しかったことは、宝さがしの医療のほうが、アラさがしの医療よりも子供たちにとっても、私たちにとっても何百倍も楽しいということでした。

近代医学の進歩は医者同志でもびっくりする時代です。その反面、私たちのところを訪れる障害児の障害は年々重くなってきております。しかしどんなに重症の子供たちでも、一人一人立派な宝物を持っています。そして、そうした宝物には、いつも優しさとか、忍耐とか、喜び、時にユーモアといったこの時代に段々稀になってゆく品性が豊富に備えられていることには、本当にびっくりさせられてしまいます。

提　言